

川崎駅周辺リノベーションまちづくりビジョン

～市民それぞれが自分らしいライフスタイルをつくり、手に入れるまち～

＜＜概要版＞＞



平成30年3月

1. **本ビジョンの位置付け**

2. **未来の川崎**

2.1 未来の川崎駅周辺エリア

2.2 ビジョンを実現するための考え方

3. **川崎市の歴史と現状**

3.1 川崎市の歴史と成り立ち

3.2 川崎市の都市・地域経営課題

3.3 川崎市の現状

4. **川崎駅周辺エリアのリノベーションまちづくり**

4.1 リノベーションまちづくりとは

4.2 川崎のリノベーションまちづくり戦略

4.3 川崎のリノベーションまちづくりの全市への波及

5. **川崎駅周辺エリアの再生コンセプト**

6. **実現の体制**

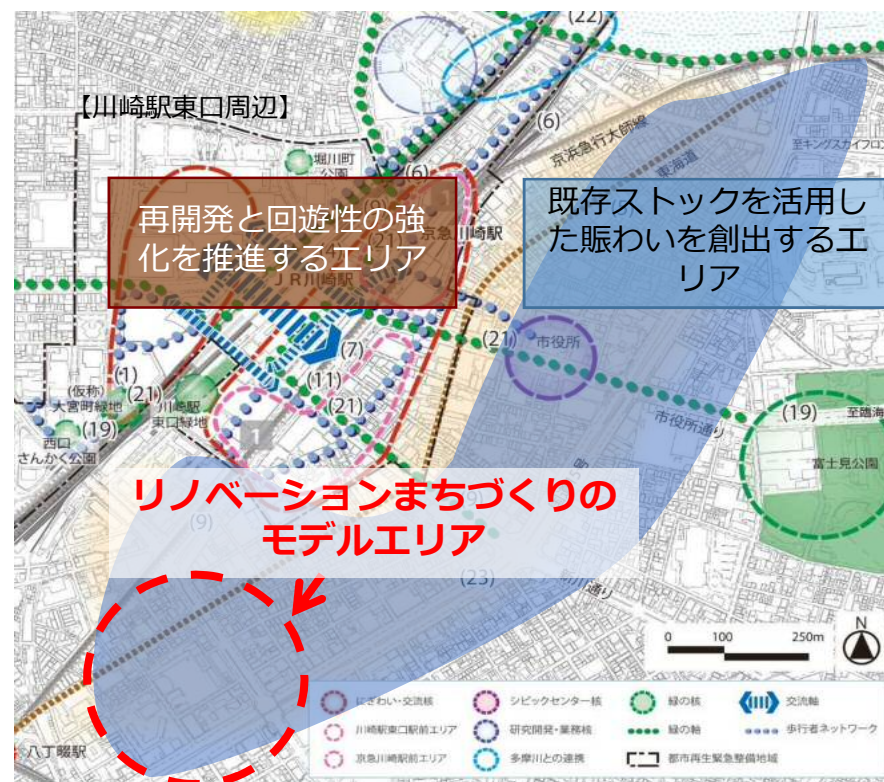
7. **リノベーションまちづくり検討会について**

平成18（2006）年4月、川崎駅周辺のまちづくりの基本方針などを示す「川崎駅周辺総合整備計画」を策定し、段階的にまちづくりを進めてきましたが、社会経済環境の変化や取組成果を踏まえ、新たな課題などに対応したまちづくりを推進するため、平成28年3月に計画を改定しました。

その中で、川崎駅東口の縁辺部（旧東海道～国道15号間）を、「既存ストックの活用による賑わいの創出エリア」として位置付けました。

「川崎駅周辺リノベーションまちづくりビジョン」は、「既存ストックの活用による賑わいの創出エリア」をより具体的なものとしていくための視点や戦略を明らかにするものとして位置付け、市の関連計画とも整合を図ります。

そして、このビジョンをもとに、日進町をモデルエリアとして先行的に取り組みを進め、人材やノウハウ、波及効果などを周辺エリアへ展開していきます。



【出典】川崎駅周辺総合整備計画より抜粋



川崎の朝。朝日がきらきらと反射する多摩川の水辺沿いに、サラリーマンたちが出勤してきた。

オフィスビルに吸い込まれるのかと思ったら、水辺の公園でおもむろに資料を広げ始めた。1人2人と集まり、いつの間にか朝の会議が始まった。新鮮な朝の澄んだ空気の中で、いきいきして見える。

上並木公園の片隅では、むかしからそこに住むお年寄りたちが将棋を打っていた。それを物珍しそうに横からのぞき込むポルトガルからの観光客。日進町のまちやどに宿泊して、朝の散歩中のような。ここ最近では、まちなかを外国人観光客が散歩する光景が当たり前になってきた。通学中の子供たちが彼らに挨拶をしながらその横を走り抜けていった。

朝の家事を終えた子育て中のママたちは、特に待ち合わせすることもなく、カフェに集まってきた。そこはかつての公共施設。集まる先輩ママやおばあちゃんたちの話は生活の知恵にあふれていて、いつだってとても役に立つ。今日も奥のキッチンで、近所のおばあちゃんが若いママたちにとっておきのレシピを伝授しているようだ。2階のコワーキングスペースでは、このまちに面白い仕掛けを生み出す家守会社の横で、地元の若者たちが何やら新しい事業を始める相談をしている。庭から託児所の子供たちの遊び声が聞こえてきた。

お昼はカフェの日替わりランチ。川崎郊外の農家から仕入れた新鮮で美味しいお野菜をたくさん使ったランチはとても人気だ。気に入った野菜はその場で買うこともできる。

最近では川崎にもこんなカフェが増えてきた。ランチをしている人々は近くの公園にまであふれ出して、みんながピクニックしているみたい。見ているだけでなんだか楽しい。

週末の午後になると、公園ではキャンプのテントを広げる家族、BBQを楽しむ大学生たち、ボール遊びをしている子供たち。そして、その横で日向ぼっこをしている地元のお年寄りたち。マルシェでは、川崎郊外の農家さんたちが自ら朝採れのお野菜を売っている。いつもカフェで食べる美味しい野菜はこの人たちが育てているんだ。少し先の公園では、今日はライブがあるみたい。色々な人がそれぞれの方法でまちを楽しんでいる。

日が落ちて辺りが薄暗くなる頃、多摩川の水辺では屋外バーの明かりが灯る。ロマンティックな夜の川崎の始まりの合図。子供たちは家に帰り、先ほどまで川でサップボードを楽しんでいたカップルたちや仕事帰りのサラリーマンたちがのんびりとお酒を飲みはじめる。でも川崎の夜の魅力はロマンティックな夜景と美味しいお酒だけじゃない。川崎には24時間美味しい食事ができるところもある。最近の川崎は24時間、安全で安心、そして美味しいんだ。

川崎は安心安全で、昼は大人も子供も楽しめて夜はちょっぴりロマンティック。遠出ができない子育て中の私も近所のみんにたに助けをもらいながら安心して子育てができていくし、何より毎日新しい川崎を発見するのが楽しみで仕方ない。川を渡る電車の車窓からそんな様子を感じ取り、ふらりと川崎に立ち寄り川崎を楽しむ、そんな人も最近が増えてきたみたいだ。

2028年3月某日 川崎 花子

1

**スモールエリアで
考えます。**

複数のスモールエリアで、そのまちの状況にあったビジョンを考え、さらにそのスモールエリアの集積として、川崎市全体のゴールイメージを捉えます。

2

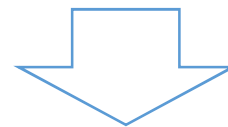
**公共施設・公共空間を
アンカーとします。**

エリアの核となる遊休化した公共施設・公共空間をアンカーとして事業化・再生することで、その影響の周辺エリアへの波及を図ります。

3

**周辺の民間遊休不動産群を
活用します。**

エリア特有の遊休化した空間資源をリノベーションによって再生することで、その影響の周辺エリアへの波及を図ります。



**こうした考え方によって、それぞれのスモールエリアの課題を解決し、
川崎市の地域課題の解決を図ります。**



- 約400年前、徳川幕府が東海道川崎宿を整備し、川崎は宿場町として大きく発展しました。
- 明治時代に入り宿駅は廃止されるも、1872年には鉄道の開通によって川崎駅が誕生しました。
- 1924年、川崎町・御幸村・大師町の合併により、川崎市が誕生。その後段階的に、西に向かって隣接する町村を編入しました。
- 金属、機械、化学などの工場が次々と進出し、重化学工業が発展しました。
- 戦災によって大打撃を受けるも、首都圏における好立地を活かして、再度工業都市として発展。公害問題も乗り越えてきました。
- 労働者を中心に様々な人を受け入れて、飲食業・興業・宿泊業などを中心に大きく発展しました。
- 近年では、グローバル化などの影響による産業構造の変化を捉え、先端産業・研究開発機関が集積や、殿町地区（キングスカイフロント）を中心とする生命科学・医療分野の企業・研究機関の集積などが進んでいます。
- また、大規模工場等の土地利用転換により、充実した鉄道網・路線バスネットワークを活かした住宅開発が行われ、人口が増加し続けています。
- 豊富な文化・芸術資源など（「ミューザ川崎シンフォニーホール」など）も集積しています。結果、多様な文化を自然と受け入れるまちになっています。

川崎市は、平成42年まで人口が増加すると推計されている反面、北部の郊外住宅地を中心として少子化・高齢化が進み、空き家・空きビルなどが増加し、まちのにぎわいの低下が懸念されています。南北に長い川崎市は、北部エリアについては鉄道の延伸に合わせて開発された沿線毎の特色が、川崎駅周辺については東海道の宿場町や工業都市を支えた発展などの歴史が、臨海部エリアについては産業構造の変化にあわせた発展があり、エリアそれぞれの課題を持っています。また、市民が想う川崎市らしさもそれぞれのエリアごとに異なっています。また、公共施設および公共空間が低利用・未利用の状態にあるものもあり、将来、公共施設の維持管理のための財政課題が顕在化する可能性があります。

①川崎駅周辺の空家・空きビルの増加と資源の低・未利用の問題の解消

建築物の老朽化が進み、国道15号付近を中心に空きビルなどが散見され、まちの縁辺部から、賑わいや魅力の低下が懸念されています。また、土地利用転換の際には、駐車場やワンルームマンションになるなど有効活用が図られておらず、鉄道高架下や道路・公園などの市有地も同じ状況です。

②市内の公共施設・公共空間の低利用を解消し、公共サービスの質を向上

イベントなどを通じて公共空間の活用が少しずつ始まっているものの、施設などを常設するような十分な活用には至っておらず、公共空間のさらなる有効活用の可能性が存在しています。

③施設維持に対する財政課題を解決

川崎市が持つ公共建築物の約7割が10年後には築年数30年以上となるなど、施設の老朽化が予想されており、それに伴う将来的な財政負担の増大・集中が懸念されています。公共施設をリノベーションし、公共施設で稼いでいくことも求められています。

④川崎らしいライススタイルと享受できるコンテンツの創造

駅に近い商店街は不動産事業化し、中小企業や個人の出店が難しく、ナショナルチェーンが多く進出しています。都市生活におけるアクティビティなど、まちなかでのライフスタイルにあった川崎らしいコンテンツが不足している状況があります。

⑤川崎のネガティブなイメージを改善

火事や事件などの影響もあり、川崎はわいざつでダーティー、治安の悪いまちという印象が根強くあります。客引きマナーなどが悪い場合も多く、タバコのポイ捨てなども未だに見られます。都市のイメージを向上させて安全で安心して暮らせるまちをつくる必要があります。



● 財政状況

義務的経費は年々増加し、歳出予算の50%を超えて財政の硬直化が一層進んでいます。

● 製造業における川崎市の事業所数及び従業者数の推移

10年間で、事業所数は467所（26.3%）、従業者数は6,811人（12.3%）減少しています。

● 年齢階級別社会増減数

15-29歳の転入が多い一方で、直近5年は35-44歳及び0-9歳が転出超過となっており、子育て世帯が転出していると考えられます。

● 少子高齢化・人口減少への転換

川崎市では、平成42年まで人口が増加するものの、少子高齢化は進行し、平成42年をピークとして人口減少へ転換することが見込まれています。

● 地区別人口増加・減少状況

ターミナル駅周辺（川崎駅、武蔵小杉駅、新百合ヶ丘駅）などを中心に人口が増加している一方、鉄道沿線から離れた地域では人口が減少している地区もみられます。

● 高齢化状況

鉄道沿線から離れた地区は、高齢化の傾向が高いです。

● 子育て世帯の状況

世帯構成のうち、子育て世帯（6歳未満の子のいる世帯）の割合が10%を超える地区の分布状況は、主に中原区・高津区・宮前区に多くなっています。子育て世帯（6歳未満の子のいる世帯）割合が10%を越えている地区は183地あり、うち124地区（全体の67.8%）が駅利用権（750m）にあります。

リノベーションまちづくりとは……

1. 今あるものを活かし、新しい使い方をしてまちを変える。
2. 民間主導でプロジェクトを興し、行政がそれを支援する形で行う“民間主導の公民連携”を進めて行く。
3. 遊休化した不動産という空間資源と潜在的な地域資源を組み合わせ、経済合理性の高いプロジェクトを興し地域を活性化する。
4. 補助金には頼らない。
5. これらによって、川崎市の都市・地域経営課題を解決する。

まちづくりの手法です。



4. 川崎駅周辺エリアのリノベーションまちづくり>>> 4.2 川崎のリノベーションまちづくり戦略

公共施設の戦略的活用・マネジメントと周辺のスモールエリアのリノベーションを掛け合わせ同時に行います。

大きいリノベーション

公共不動産の利活用

川崎市が所有する公共施設を活用します。

- ポテンシャルを最大限活かし、収益を上げ、質の高いサービス、環境を提供するとともに、持続可能な維持管理を実現
- 市民の都市生活のアメニティーの拡充
- 周辺の民間不動産の利活用の促進



小さいリノベーション

民間不動産の利活用

公共不動産の周辺エリアの民間不動産オーナーが所有する不動産を活用します。

- 川崎らしい魅力的なお店やサービスの展開
- リーズナブルかつ多様な住宅の流通
- 自立した民間事業による地域経営課題の解決

低利用・未利用の
公共施設・公共空間と
周辺の民間遊休不動産

PPPエージェント会社
家守会社

周辺エリアの
魅力的なコンテンツ



民間プロジェクトによって、川崎の都市・地域経営課題の解決

4. 川崎駅周辺エリアのリノベーションまちづくり>>> 4.3 川崎のリノベーションまちづくりの全市への波及

日進町から始まったエリアリノベーションを川崎駅周辺エリアに伝播させ、そこから川崎市の全市域へと考え方と手法の波及を図ります。

第1ステップ

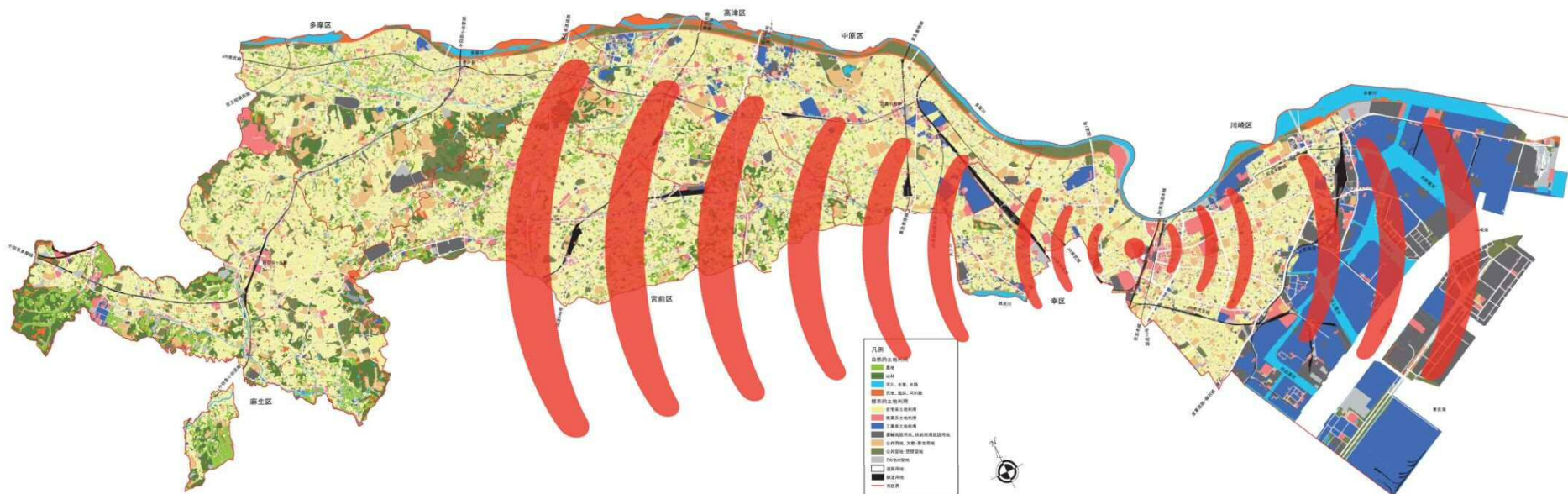
川崎駅東口周辺の日進町エリアで活動する家守会社を中心にリノベーションまちづくりを推進し、遊休不動産を活用した事業を通じたエリアの活性化を目指します。

第2ステップ

川崎駅周辺の遊休化した公共施設・公共空間を活用した事業主体となるPPPエージェントを育成し、エリアリノベーションを推進します。

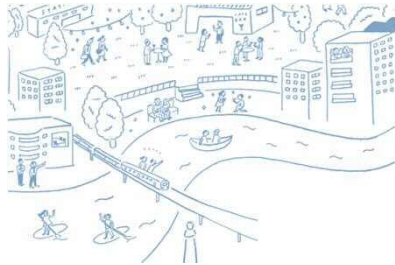
第3ステップ

川崎駅から進めてきたリノベーションまちづくりが川崎市全域に伝播します。



土地利用現況図（平成22年）

水辺のアクティビティ



川崎の水辺と周囲の公共空間を活用して、都市的な屋外のアクティビティがかわさきのまちなかで見られる日常を作り出すことで、川崎のまちの都市的なライフスタイルを発信し、イメージアップを図ります。

24時間安心して 楽しいまち



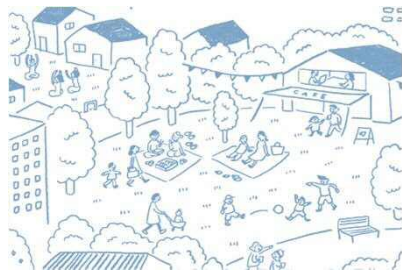
川崎駅周辺を昼間はもちろん24時間安心して楽しめるまちにします。そのためのまちの新しいコンテンツをリノベーションで次々に生み出して、都市型産業を振興します。

新しいツーリズム



羽田空港との距離を活かし、日進町の簡易宿泊所やまちを、外国人向けの宿泊施設・ゲストハウス・まち全体を宿と見立てたまちやどなどにリノベーションします。

豊かな住宅地での暮らし



川崎のまちの大部分を占める私鉄沿線の郊外住宅地の住宅の省エネルギー化やバリアフリー化を通じて、川崎らしいライフスタイルで高齢者も若い子育て世代も豊かに暮らせるようにリノベーションします。

新しい福祉・ 子育てのサービス



新しく生まれてきた、子育てや福祉に対する様々な生活者のニーズにあったこれまでにないサービスをリノベーションで次々に生み出していきます。

安全で災害に強い コミュニティ



都市公園で日常的に市民の様々な活動を受け入れる寛容な公共空間を目指します。地域のコミュニティやつながりを生み出すことで、防災や防犯面を向上させ安心して安全なまちを目指します。

川崎リノベーションまちづくりに関する官民連携

関係者がフラットに集まれる場づくり、金融支援、
啓発活動、機運醸成、産学連携、創業者育成・支援 など

不動産オーナー (公共&民間)

志を持つ所有者による
遊休不動産の提供

- 不動産を使ってまちに貢献したい
- 不動産価値を維持・向上させたい

家守会社 PPPエージェント (民間自立型まちづくり会社)

補助金に頼らない民間自立型事業
による構想の具現化・コーディネート

- エリアマネジメント
- まちに投資
- 不動産マッチング
- 事業企画、運営、転貸

ビジネスオーナー

川崎市に新たなコンテンツを
生み出す人

- 企業、豊かな暮らしがしたい
- ビジネスを通じて、まちに貢献したい
- 持続可能な（想いをつなぐ）まちづくり

> 川崎市の役割

- 庁内の会議体官民連携の橋渡し役
- 組織横断的な公共施設マネジメント
- 公共施設・公共空間をリノベーションして活用
- 家守会社・PPPエージェントの育成
- リノベーションまちづくりの実現に関する規制緩和
- 政策検討：ファイナンス（制度融資）、住宅政策、高齢者福祉、省エネルギー、公共施設、道路、子育て、シティプロモーション、観光など

7. リノベーションまちづくり検討会について

平成28年12月から平成29年10月にかけて「リノベーションまちづくり検討会」を開催しました。

検討会では、専門家と通年委員、そして、各検討会のテーマにあったテーマ委員及びゲストを招聘してラウンドテーブルを構成し、市民などの聴衆を交えて、どのようなまちづくりをしていくべきか議論を行いました。

<専門家>

嶋田 洋平 (株)リノベリング代表取締役

<通年委員>

石井 秀和 (株)南荘石井事務所代表取締役
田村 寛之 川崎経済新聞編集長
的場 敏行 (株)NENGO代表取締役社長

検討会	テーマ委員およびゲストスピーカー名簿		
第1回	テーマ委員	嶋田 憲嗣 武井 雅子 松田 志暢	ジェクト(株)不動産部仲介営業課課長 (株)ヨネヤマ監査役 (株)エヌアセットワクワク広報室
第2回	ゲスト テーマ委員	馬場 祐介 安井 浩和 石井 潤 石田 典朗 小泉 博司 千葉 俊宏 寺田 哲也 中村 元樹 水沢 洋	なるたけ店主 株式会社稲毛屋代表取締役 (株)GULCH代表取締役 (株)エスフィールド代表取締役 小泉農園 (有)DEED代表取締役 (株)リーブ代表取締役 ピースホーム(株)代表取締役 サガミホールディングス(株)代表取締役社長
第3回	ゲスト テーマ委員	大島 芳彦 宮崎 晃吉 今田 正則 瀧澤 昌子 水沢 洋 吉岡 明治	(株)ブルースタジオ専務取締役 HAGISO代表 (株)やどかり取締役 Kincarn International School園長 サガミホールディングス(株)代表取締役社長 ON THE MARKS 総支配人
第4回	ゲスト テーマ委員	竹内 昌義 水村 容子 菊田 知展 小林 乙哉 滝島 敬史 林 直人	東北芸術工科大学教授 東洋大学教授 京浜急行電鉄株式会社課長補佐 東京急行電鉄株式会社課長補佐 小田急電鉄株式会社課長 川崎市住宅政策部長
第5回	ゲスト テーマ委員	馬場 正尊 柿原 優紀 北村 岳人 沖山 浩二	Open-A Ltd. 代表取締役 Tarakusa株式会社 代表 川崎市拠点整備推進室担当課長 川崎市拠点整備推進室課長補佐

メインテーマ：不動産オーナーと家守が一緒に進めるまちづくり

日 時：平成28年12月19日（月）18時00分～21時00分 場 所：かわさき老人福祉・地域交流センター 2階ホール



川崎市から、川崎の現状と課題として、少子高齢化やまちの状況、川崎駅東口周辺の課題や路線価の状況などを説明しました。次に、（株）リノベリングの嶋田洋平氏から、「不動産オーナーと家守が一緒に進めるまちづくり」をテーマに、北九州市などの取組事例を紹介するとともに、リノベーションまちづくりとは、今あるものを活用し、補助金に頼らず、江戸時代の「家守」の発想で、民間の力で、従来からある要望型・陳情型のものではなく、自分たちのまちを作っていく取組であると説明がありました。

意見交換概要

- 日進町で何かやりたい。シェアオフィスをやろうとしている。
- 魅力あふれる生田緑地をうまく活用したい。
- 多摩川は空間資源として素晴らしい。事件などもあって、暗いイメージもあるが、重要な資源。
- 福祉と絡めたものづくりがやれるとよい。
- Amazonもあり、モノを右から左に流すのではやっていけない。ハンドメイドのモノを売れるとよいが、事業成立が難しい。
- 主婦の力はまだまだ発揮できる。
- 学生がまちづくりに参加できるような仕組みを作りたい。
- 外国人が来て、魅力に思うまちにしたい。浅草より川崎大師のほうが良いと言っていた外国人もいる。羽田空港との距離も近い川崎で、まず一泊目は川崎、となるような仕掛けをしたい。
- 武蔵小杉は子どもの遊び場が少ない。子どもの遊び場は大切。
- 川崎区は東海道という資源がある。
- こういう機会につながれて、何か新しい仲間を作れるとよい。東また、地元商店街にお金を落とす仕組みを作ればよい。
- 簡易宿泊所で火災事故もあり、マイナスイメージがあるが、イメージを-から+に転換できるとどれだけすごい効果があるかわからない。日進町のイメージを変えたい。

メインテーマ：まちの新しい食の産業

日 時：平成29年1月31日（火）18時00分～21時00分 場 所：オンザマークス 地下



なるたけ店主の馬場祐介氏から、「生産者をつくる新しい飲食の形」をテーマに、食の安心と生産者や地域とがつながるレストラン経営について、続けて、株式会社稲毛屋代表取締役の安井浩和氏から、「生産者をつくる新しい小売の形」をテーマに、早稲田の商店街で経営している「こだわり商店」の取組について、お話しをいただきました。

意見交換概要

- 臨海部の埋立地などで農業をやりたい。川崎南部地域は、農地がもうない。北部から南部に野菜を輸送するには大変。
- ネットで何でも買える世の中なので、安売り競争はしてもしょうがない。選ばれるようにならないと。
- 今は、SNSでさまざまなつながりを生むことができる。
- 小さいビジネスをほそぼそと続けるのも良い。
- 土が無くても、今は農業ができる。野菜は、極論を言えば、新鮮なものがうまい。川崎で地産地消できると良い。
- インバウンドについては、外国の人は地のモノを食べたがる。
- 地産地消もわかるが、ビジネス的にはコスト面の課題がある。
- 今後はハラル対応も重要。

メインテーマ：地域の新しいツーリズム

日 時：平成29年3月21日（火）18時00分～21時00分 場 所：オンザマークス 地下



（株）ブルースタジオ専務取締役の大島芳彦氏から、今あるものの価値を見出すことの重要性や、まち全体を宿と見立てたイタリアのアルベルゴ・ディフーズなどについて、続けて、HAGISO代表の宮崎晃吉氏から、築50年のアパート「萩荘」をリノベーションし、若いアーティストが無料で個展を開けるようにした取組や、空きアパートをリノベーションし、まちを宿とみだてて、食事は提供しない宿「hanare」の取組について、お話しをいただきました。

意見交換概要

- 訪日外国人客が急増しており、羽田にほど近い川崎では、これを活かさない手はない。日本の顔となることのできる場所。
- 川崎市全体でツーリズムが成り立つといいと思っている。地域の魅力をもっと発掘していきたい。
- 川崎のハロウィンやかなまら祭りは、外国人がすごく集まってくる。魅力発掘には「歴史」がキーポイントでは思う。
- 日進町のあたりは、IT系産業の外国人が多く、インド系の人が多い。日進町のInternational school幼稚園には、横浜、品川、そして千葉から通ってくる人が多い。
- 世界を何十回と回ってきたが、誰も川崎という都市を知らない。川崎が、外国人に来たいと思ってもらえるようなまちにしたい。
- 今のところ、外国人旅行客が川崎に泊まる理由が無い。魅力の点を増やすとともに繋げていき、面的な魅力を創出できるとよい。
- 焼肉は、日本独自の進化を遂げており、インバウンドには向き。
- 地域に受け入れられることを当初目的とするより、自分の取組に共感してもらえる人を少しずつ増やしていくと考えると良い。やっている自然と味方は増えるもの。
- コミュニティの場を創出するためには、何か日常的に使えるスペースとしなければならない。そうしないと人は集まらない。
- 川崎では、人々がなんとなく佇める場所が少ない。アゼリア地下通路の公共スペースはたくさんの方がいつも座っている。

メインテーマ：住まいと福祉（全市展開と沿線まちづくり）

日 時：平成29年5月23日（火）18時00分～21時00分 場 所：武蔵溝ノ口駅前自由通路



これまでの検討状況を振り返ったあと、東北芸術工科大学教授の竹内昌義氏から、日本の住宅の断熱性の課題や住宅の高断熱化のメリットなどについて、東洋大学の水村容子氏から、高福祉国家スウェーデンの事例を交えながら、高齢・障害者など誰もが住みやすい居住環境づくりについて、その後、東急電鉄の小林乙哉氏から東急池上線リノベーションスクールのお話をいただきました。

その後、(株)リノベリングの嶋田洋平氏から、これまでの検討会のキーワードを振り返るとともに、川崎市を川崎駅周辺・臨海部・郊外住宅地の3つにゾーンを分けて考えることの必要性についてお話をいただいた後、委員及び参加者の意見交換を行いました。

意見交換概要

- お金が他地域にキャッシュアウトしないようなまちづくりをしなければならない。そのためには、行政がタテ割りではいけない。
- 川崎市内はお金に厳しい人が多いが、健康維持はお財布にもメリットがあると伝えていくべき。
- 高断熱光熱費込川崎ブランド賃貸住宅を作ってみたらいかがか。
- 小田急多摩線沿線の高齢化はこれから。駅に人・車が寄り付きにくい。
- まだ人口増加を続けている川崎市が、人口減少の危機感をもって取り組んでいるのが素晴らしい。
- 耐震・断熱・バリアフリーの3点セットが今後重要。
- 麻生区でラジオ局の開局に向けて動いている。住宅断熱に真剣に動いていくのであれば、お手伝いしたい。
- 多摩川のサイクリングロードはおしゃれ、など、かっこいいとまねする人が出てくるとよい。情報発信は大変重要。
- こういう取組は学生たちの良い刺激になる。いいテーマ選びを。
- ずっと住んでいる川崎市民は、川崎のことを「嫌いじゃないけど、好きじゃない」。シビックプライドを持ってほしい。
- 川崎から青葉区に引っ越した。大きな理由は「保育園」の関係。
- 日本は未だ持ち家政策だが、他の国ではリロケーションが当たり前。子育て世帯向け賃貸住宅の供給が少ないため、買わざるを得ない部分もある。ファミリー向けの賃貸住宅が増やせると良い。
- 川崎には3rd place的な場所がない。居場所を増やせると良い。

メインテーマ：公共空間の利活用について

日 時：平成29年7月21日（金）17時00分～20時00分 場 所：川崎ルフロン1階シンデレラストEPS



これまでの検討状況を振り返ったあと、Open-A Itd.の馬場正尊氏から、N.Y.のブライアントパーク等の事例に学ぶ、日本における公園の活用方法として、民間主体のPPPエージェントによる管理運営などについてや、社会実験・一時利用許可・指定管理などの3つの公共空間活用に使えるカードについて、そして、Tarakusa株式会社の柿原優紀氏から、公園でウエディングを行うまでの経過や事例をお話しいただきました。

意見交換概要

- 南池袋公園は地下に自転車駐輪場を設置して稼いでいる。民間に稼がせる仕組みを。
- 川崎は懐が深く、比較的寛容なまちだと思う。今も、ストリートミュージシャンが大音量で歌っているが、川崎北部地域だとすぐ苦情が入るのでは。
- 地域ごとに、活躍する人もかなり出てきた。
- 意外と、外国人にとって川崎は住みやすく、海外でも評判なのでは。
- 行政は、民間の人がやりたいことを上手く応援して欲しい。規制を上手く外して行って欲しい。
- 川崎は場所ごとに文化が違う。
- まちづくりにおいて、もっと行政と連携していきたい。
- 川崎は寛容。「見た目は怖目、中身はお茶目。」
- 川崎には、民家園や国際交流センターの茶室など、素敵な公共施設もある。ぜひ活用して欲しい。
- 医療から予防へという流れの中、診療所で何かできないかと思っている。→病院でお誕生会をやったらどうか。
- 小田急線の複々線化によって最も恩恵を受けるのは川崎の地域。ぜひまちづくりをやってきたい。
- 皆が続けられる動機としては、楽しいかどうかが重要。痛みながら…では続かない。
- エリアが広すぎるとダメ。半径200mくらいのエリアで。
- 溝の口にフラッグシップとなる店を出したい。